

2022 年度 日本語学習支援事業実施報告

Dagvadorj Adiyanyam

閔 琬新

東北大学大学院教育学研究科

1. 日本語学習支援事業の概要

本事業は、教育学研究科の外国人留学生（以下、学生という）を対象に、研究活動を行う上での実用性の高い日本語能力向上の支援を目指し、2014 年度から実施されているものである。本事業には二つの活動内容が含まれている。一つは、講義形式の日本語授業であり、これは、長年地域社会で日本語ボランティアをしているサポーターが日本語の文法および読解の授業を行うものである。もう一つは、対面形式による日本語添削であり、サポーターが学生と 1 対 1 で対面しながら発表資料、レポートや論文などの添削を行うものである。

2022 年度は、年度初めの 4 月 22 日に先端教育研究実践センター担当スタッフ 2 名とサポーター 6 名で打ち合わせを行い、本年度の実施方法について検討した。その結果、2020 年度と 2021 年度の実施方式であった（1）メールでのやり取り（Google ドライブを使ったやり取りを含む、以下、メールでのやり取りという）、（2）パソコンを使ったオンライン上でのやり取り（Google Meet 及び Zoom を使用、以下、オンラインでのやり取りという）に加えて、（3）対面式添削を再開する形で本年度の事業を進めることで合意した。

一方では、今年度も、新型コロナウイルス感染症への懸念を主な理由とする担当サポーターの事情により、講義式授業を実施しないこととした。

プログラムの実施日時は例年通り、毎週金曜日の 13 時 10 分～16 時とし、第 1 学期では文科系総合研究棟の 203 教室を、第 2 学期では 204 教室を利用することとなった。

学生への周知方法に関しては、対面式添削をプログラム①、メールでのやり取りをプログラム②、オンラインでのやり取りをプログラム③とし、昨年度同様、プログラム開催 1 週間前を目途に学生のメーリングリストへ一斉メールで案内した。参加希望の申請には今年度から Google フォームを使用し、メール、SNS での申請も受け付けた。

プログラム①の内容

- 学生の参加希望を水曜日までに出してもらおう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、添削してほしい文書を 2 部印刷して金曜日の 13 時 10 分に 203（204）教室に直接来るよう伝える。
- 金曜日の 13 時 10 分から教室でサポーターが学生と 1 対 1 で対面しながら文書の添削を進める。

- 文章の添削が終わった時点で学生は添削結果を持ち帰る。

プログラム②の内容

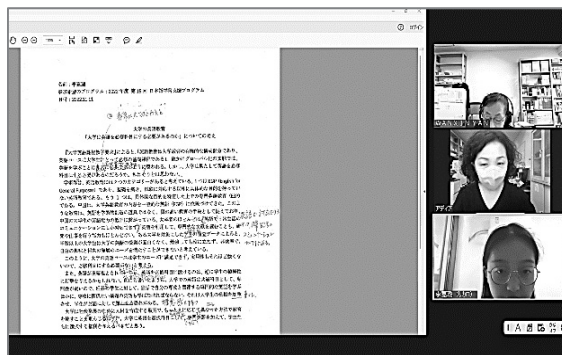
- 学生の参加希望を水曜日までに出示してもらう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、金曜日の午前中までに、添削してほしい文書ファイルを担当者まで送るように伝える。
- サポーターの方々に、毎週金曜日 13 時 10 分に 203 (204) 教室に集まってもらう。
- 学生から送られてきたファイルを担当者が印刷し、サポーターの方々に手渡す。
- 日本語をその場で直してもらい、添削が終了したファイルを担当者が預かる。
- 担当者が預かったファイルをスキャンし、その日のうちに学生にメールで返送する。

プログラム③の内容

- 学生の参加希望を水曜日までに出示してもらう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、金曜日の午前中までに、オンライン上で添削を受けたい文書のファイルを担当者まで送るように伝える。
- 添削する資料を受け取り次第、Google Meet もしくは Zoom ミーティングの URL を学生に送る。
- 当日はパソコン、ヘッドホン、フェイスシールド、消毒グッズを教室及びオンラインやり取りを行う部屋に準備しておく。
- サポーターの方々に、毎週金曜日 13 時 10 分に大学に集まってもらう。
- 13 時 10 分から 13 時 45 分の間にサポーターにファイルを確認してもらい、13 時 45 分から学生とやり取りをしながら日本語の添削を進めてもらう。



プログラム①② 対面及びメールでのやり取りの様子



プログラム③ オンラインでのやり取りの様子

2021 年度には、新型コロナウイルス感染症関連の出入国規制により、入学したものの日本へ入国できずにいた学生が何人もいたが、本年度は随時日本への入国ができたので、1 名の入学予定者を除き、参加した学生全員が日本国内（仙台市内）に滞在していた。

2. 2022 年度の実施状況

今年度も、5月と10月の上旬に学生への説明会（オンライン）を開き、その次の週からプログラムを開始した。初回の5月20日、プログラム開始前に教育学研究科長、先端教育研究実践センター長兼教育学研究科副研究科長、副センター長兼国際交流支援室長、センター担当スタッフ2名、日本語サポート会の代表1名、サポーター6名が参加した顔合わせ会があった。



プログラムに関するオンライン説明会 2022. 5. 13



顔合わせ会の様子 2022. 5. 20

2022年度のプログラム実施状況は表1（後掲）の通りである。2022年5月から2023年1月まで、計24回のプログラムを実施した。

新型コロナウイルス感染対策としては、パーティションやフェイスシールドの利用、使用する教室の換気、使用する機器類、机、いす、ドアノブ、照明及びエアコン・換気扇のスイッチなどの消毒、参加者の検温（開始前と終了後の2回）などを行った。

昨年度同様、大学院生2名（外国人留学生）をAA（アドミニストラティブ アシスタント）として採用し、プログラム前後の事務作業、教室の準備作業（換気・消毒作業など）を手伝ってもらった。これら2名の大学院生は執筆した論文等を添削に出しながら、AAとしてプログラムの実施に貢献し、サポートする側としても活躍した。

3. 2022 年度の参加状況

2022年度の参加状況は表2（後掲）に示す通り、全24回のプログラムに26名（延べ117名）の学生が参加した。参加者の在籍課程の内訳は入学予定者1名、学部生2名、学部研究生6名、大学院研究生1名、博士課程前期の学生13名（M1：5名； M2：8名）、博士課程後期の学生が3名である。5月から通常通りに開始することができたこともあり、参加者数及び添削した文書の量は2020年度より大幅に増加し、2021年度とおおよそ同じであった。

参加頻度については、学部研究生、大学院研究生及び博士課程後期の学生が多かった。学部研究生の半分以上が4回以上、最も多い人で7回参加している。研究生（大学院研究生1名を含む）の場合は大学院入学試験での小論文執筆に備えて論文執筆能力を向上させるためメールでのやり取りであるプログラム②に、同じく大学院入学試験に必要な面接試験の準備をするためオンラインまたは対面でのやり取

りであるプログラム①とプログラム③に参加する傾向が見られた。

博士課程後期の参加者の場合は発表資料、投稿論文、特定研究論文など、ページ数がやや長い文章の日本語添削を目的として複数回の参加となる傾向が見られた。

一方、博士課程前期の参加者の場合は課題研究論文、修士論文などの日本語添削を目的に1回～2回のみ参加した学生が多かった。課題研究論文や修士論文の提出締め切り日の直前に、1人の学生から分量の多い論文の日本語添削を依頼されたケースが数回あった。そのため、サポーターの方々には長い時間をかけて添削していただくことになった事例が数回あった。

表1 2022年度日本語学習支援プログラムの実施状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
1日	金	日	水	金⑦	夏季休業		土	火	木	日	春季休業			
2日										金⑮				
3日			金③											
4日										金⑭				
5日														
6日													金⑳	
7日									説明会					
8日				金⑧										
9日													金⑲	
10日			金④											※1
11日										金⑮				
12日														
13日		説明会												【休】
14日									金⑫					
15日				金⑨										
16日													金⑳	
17日			金⑤											
18日										金⑯				
19日														
20日		金①												金㉒
21日									金⑬					
22日				金⑩										
23日													金㉑	
24日			金⑥											
25日										金⑰				水㉔
26日														*
27日		金②												*
28日									【休】					
29日				金⑪										
30日														
31日														※2

※【休】→令和4年度学年歴による休業日 *→大学院入学試験

※1→卒業論文、修士論文、博士論文提出期限

※2→課題研究論文、特定研究論文I、特定研究論文II 提出期限

表 2 2022 年度日本語学習支援プログラムへの参加状況

回数	実施日	参加者数	プログラム別の参加学生			サポーター人数	ファイルの種類、ページ数	
			①	②	③		ワード	スライド
第1回	5月20日	4	1	2	0	6	16	
第2回	5月27日	5	0	5	0	6	15	
第3回	6月3日	5	0	5	0	6	16	
第4回	6月10日	4	0	4	0	6	14	31
第5回	6月17日	5	0	4	1	6	28	
第6回	6月24日	4	0	4	0	5	30	
第7回	7月1日	4	1	1	2	4	13	
第8回	7月8日	4	0	4	0	5	25	
第9回	7月15日	4	0	3	1	6	18	
第10回	7月22日	4	1	3	0	6	29	
第11回	7月29日	4	2	2	0	6	14	
第12回	10月14日	5	3	2	0	6	19	
第13回	10月21日	4	1	2	0	6	44	
第14回	11月4日	4	2	2	0	5	25	
第15回	11月11日	5	2	2	1	6	11	27
第16回	11月18日	6	6	0	0	6	11	14
第17回	11月25日	2	1	1	0	5	50	2
第18回	12月2日	5	2	3	0	6	32	
第19回	12月9日	2	0	2	0	6	43	
第20回	12月16日	7	2	5	0	6	32	
第21回	12月23日	10	4	6	0	6	71	
第22回	1月6日	8	2	6	0	6	71	
第23回	1月20日	7	2	5	0	6	109	
第24回	1月25日	5	1	4	0	6	37	
計24回		117人	33人	77人	5人		773	74

4. 前年度で残された課題への取り組み

2020 年度と 2021 年度で残された課題の解決策として、以下の 3 点の取り組みを行った。

1) メールでの対応の場合は、一方通行であるためサポーターが文章を添削する際に、執筆者の意図を把握できない、あるいは逆に学生がサポーターの添削意見・コメントを十分に理解できないことがたびたび見られた。そこで、担当スタッフにはコーディネーターとしての役割が求められることになった。サポーターは文章を添削する際に、学生の意図を把握するために担当者と相談しながら添削を進めることができた。そして、担当者は添削された文章を学生に返送する際に、サポーターのコメントを整理し、要点をまとめた上で学生に伝えるようにした。

2) 文章を添削する前に、担当者はサポーターから特にフィードバックしてほしいことを学生から提示してもらうことにした。また、添削後に、担当者がサポーターのコメントを学生に伝える時、学生の理解

を確実にするためにメール以外に対面でも説明することを数回行った。

3) 次回のプログラムで添削する文書の量を把握するため、申し込み方法をメール中心から Google フォーム中心に変更し、添削してほしい文書のページ数を記入する項目を設けた。そしてプログラム実施日の前日にサポート会の事務局担当者へ参加学生の人数と文書量を伝え、サポート会のメンバーがプログラム当日の作業量を把握できるよう努めた。

プログラムへの申し込み方法を Google フォーム中心に変更したことで、学生にとっても数回のメールでのやり取りが省かれ、「直接ウェブサイトで予約することができたら」といった学生の声に応えることができた。

6. 日本語サポーターからのコメント：日本語学習支援事業に参加して

日本語サポーターの方々より今年度の活動に関するコメントをいただいている。以下に紹介する。今年度も 2020 年度、2021 年度に続いて、通常とは異なる方法での実施となり、サポーターの方々には多くのご負担をおかけしたことと思う。にもかかわらず、サポーターの方々は、新しい実施方法を前向きに受け入れ、一緒に検討や提案をしてくださり、日本語学習支援事業担当スタッフと学生を支えてくださった。記して心より感謝を申し上げたい。

阿曾 容子 氏 「日本語サポート会」に参加して

コロナ禍による学生との対面自粛が少しずつ緩和され、日本語サポート会の添削活動も徐々に本来の形に戻ってきました。助詞や文末表現および自国語と日本語のことばの意味の違いについては用紙だけでもある程度の添削はできます。ですが、学生が表現したいことや、後文へのつながりが見えないときは学生の考えを聞きながら添削することの必要性を痛感しています。

あらためて添削のあり方について感じた一年でした。

奥平 正子 氏

今年度(2022年)は、しっかりとした感染対策をしながら、予定通り、5月20日(金)から日本語サポート会を始める事が出来ました。

初日のこの日には、野口和人研究科長、小島秀樹センター長、安保英勇国際交流支援室長の3名の先生方にも御臨席戴きました。「3名もの先生方に参加して戴いたのは、私たちの活動が評価されているのかな？」と私は嬉しく思いました。

2014年11月に開始したこの日本語サポート会は、今年度で9年目を終了したことになります。サポーターの方々には止むを得ない場合を除き、この活動への参加を何よりも優先して下さっている事に事務局担当も兼ねている者として、改めて感謝申し上げます。

2020年度や2021年度はメールやオンライン形式などの間接的な指導が多かったのに対して、今年度は間接的な指導に加え、対面形式も毎回の様に行われましたので、留学生と私たち指導者との間で理解を深める取り組みになったと感じております。特に11月18日(金)は、6名の出席留学生が全員対面

形式を希望された時に、私たち6名のサポーターも全員が出席していて、要望に応じることが出来た事は、忘れられない思い出となりました。

やはり、対面形式の方が細部への指導には重要ですし、また、お互いに顔を見ながらの方が理解も深め合えるのには効果的な事は事実ですので、2023年度は“face to face”の形式が毎回、可能となる事を願っております。

佐々木 市子 氏

1年が経つのは速いものです。今年度もなかなかコロナは収束せず、メールで送られてきた原稿を添削するのが中心でした。これはこれで自分でも勉強になるのですが、やはり対面の方が楽しい。来年度に期待しています。

馬場 徐子 氏

今年度もサポート会は主にメール（紙面）と対面の併用という体制で進みました。

メールと対面には、それぞれの良い面だけではなく、気になる面もあることを実感しています。

対面の場合は、学生と一緒に原稿を読みながら、気になる点や分かりにくい文章について、意図を直接相手に確認しながら進めることができます。そして、修正点についてはなぜ修正した方がよいのかを学生に説明し、納得してもらうことができますし、分かりにくい文章については、学生の説明を基に言葉を補ってできるだけ読みやすく正しい日本語に近づけることができます。

しかし、何しろ私にとっては初見の原稿ですので、おそらく見落とししている箇所があるだろうと思っています。ただ、見落とししてしまった部分は論文にとって大きな問題となる部分ではないだろうと自分を納得させています。

一方、メールの場合は、何度も読み直ししながら修正を加え、かつ修正箇所を含め文章を初めから通して再度確認することができるので見落としは少ないだろうと思います。

ただ、学生が不在のまま一方的に私の認識の範囲で手を加えることになるので、学生の意図と異なった内容になっていないか非常に気になります。思い込みによる間違った修正は一番避けなければならないことなので、手持ちの機器で頻繁に検索し、確認することでそれを防ぐように努めています。

過去に、読み間違えて後で笑ったこともあります。論文中に突然「孫が～」とあり「え、なぜここで孫（まご）？」と戸惑ったのですが、論文筆者が「孫（そん）さん」だったのです。

コロナ禍により、対面の代わりにメールを通しての校正が始まったのですが、上述のようにメールの方法には対面にはないメリットがあります。コロナ禍収束後も、メールによる校正をサポートの選択肢に入れていただければと感じています。

米川 慎一 氏

今期のサポート活動では新型コロナの行動制限緩和があり、対面形式での活動が増加した。対面形式のメリットは文章の添削等において生じる様々な疑問を確認しながら対応できる点だ。つまりお互いの

意図を双方向で確認しながら進められるのだ。メールによる添削では、一方的な作業になり、それぞれの意図が伝わらず歯がゆい面も多かった。

今期においては、担当教員との確認作業を行なったことで、学生との意思疎通も多少でも改善されたのではないかと。担当教員の方々には感謝したい。

来期は行動制限もさらに緩和されるだろう。正常な活動が実現されることを期待したい。

大久保 和雄 氏

「なぜです・ます」で論文を書いてはならないのか? という副題にひかれ、平尾昌宏著『日本語からの哲学』を読んでみた。「です・ます」で書いた著者の論文が、さる大学の紀要になぜか掲載拒否されました。このことをきっかけに書かれたこの本は、興味深くはありましたが、哲学だけに思った以上に面倒な内容でした。「です・ます」にするか、「である」にするか、文章を書こうとする人なら一度ならず悩む問題ではあります。学術論文をこれからも書くことがないだろう私にはどうでもいいのですが、毎週接している留学生の皆さんにとっても文末は悩ましい問題なのだろうなと思いつつ、この本を読みました。たまたま同じころ読んでいた、故中井久夫氏の『私の日本語雑記』にも、「センテンスを終える難しさ」という文章があることを発見。高名な精神科医にとっても、日本語の文末は悩ましい問題であったことに一安心していたところでした。最後まで決まらない日本語の在り方には、留学生ならずとも悩ませられているようです。

ところで、サポート会の仕事として留学生の論文を読んでいる限り、文末の添削は思ったより多くないような気がします。文末よりも、助詞の扱いに苦しむ学生のほうが多いのではないのでしょうか。留学生にとっては、「私は留学生です」と「私は留学生である」との違いよりも、「私は留学生である」と「私が留学生である」のちがいのほうが理解しづらいように思えますが、どうでしょうか。

この問題は興味深いのですが、哲学の沼にはまり込みそうなのでこれぐらいで切り上げます。最後に、今の私の悩み。「私はあなたを愛しています」を〈である〉体では、どう書いたらいいのでしょうか。誰か教えて下さい。